

# ロサンジェルス暴動とコリア系アメリカ

—人種と文学の視点から—

池野 みさお

## I

1992年4月29日に発生し、コリア系アメリカ人から“Sa-I-Gu”と呼ばれているロサンジェルス暴動からすでに23年の歳月が過ぎた。“Sa-I-Gu”というのは、4-2-9、つまり4月29日のことを指している<sup>1</sup>。この日は、そのおよそ1年前、1991年3月3日に起きたロドニー・キング (Rodney King) 事件に対する地裁陪審の評決が下された日だった。事件当日、カリフォルニア州在住の、25歳のアフリカ系アメリカ人キングは、ハイウェイでスピード違反を起こし、警官たちに車から引きずり降ろされた後、地面にうつ伏せにさせられ4名の警官から殴る蹴るの激しい暴行を受けた。この事件がきわだっていたのは、警官による暴行の様子が、近隣の住民ジョージ・ホリデイ (George Holliday) によってビデオテープに録画され、それがアメリカ中のテレビニュースで繰り返し放映されたことである。(Abelmann and Lie 2) コリア系アメリカ人とロス暴動の問題を扱った *Blue Dreams* (1995) を著したナンシー・アベルマン (Nancy Abelmann) とジョン・リー (John Lie) によれば、当時このニュースを見た者の中で、「キング殴打事件に関わった最悪の犯罪者たちが告発され、正当に罰せられることを疑う者はほとんどいなかった」(2)。

ところが、1992年4月29日に、12名のシミヴァレーの陪審員たち(ヨーロッパ系10名、ラティーノ1名、フィリピン系1名) (Stevenson 284) が下した評決は全員無罪放免というものだった<sup>2</sup>。シミヴァレーはロサンジェルス郊外にある白人が大部分(98%)を構成するコミュニティで、ロサンジェルス市警察に好意的な場所だといわれている (Stevenson 284; 高 35)。警官の弁護士はたくみな戦術を展開し、法廷をこの地に移したのである (高 35)。それで

もなお、ホリデイのビデオは警官たちの有罪を示す動かぬ証拠だと多くの人は考えていたようだ。しかし、在日コリアンの高賛侑の『アメリカ・コリアタウン』によれば、「匿名の条件でABCテレビの会見に応じた陪審員の一人は『ビデオテープを30回以上みたが、警察の棍棒はあまりキングにあたっていなかった。テープだけでなくほかの証拠も考慮したのだから、評決については後悔していない。今夜はよく眠れるだろう』と語った」(36)ということである。一方、*The Contested Murder of Latasha Harlins* を著したUCLAの歴史学者ブレンダ・スティーヴンソン (Brenda Stevenson) は、キングは当時飲酒はしていたが、武器はいっさい所持しておらず、警官側にはけがをした者は全くいなかったのに対し、キングの方は警官の殴打によって大けがをし、外傷センターへの入院を余儀なくされたことを明らかにしている。(283)

キングの負った負傷を鑑みると、さきほどの匿名の陪審員の言葉は事実を反映していないように思えるが、無罪評決の結果、全米各地で激しいデモや暴動が起きた (Abelmann and Lie 2; 高 42)。しかし、最も規模と被害が大きかったのはやはりロサンジェルスで、いわゆるロス暴動は3日間続いた。その被害はすさまじいもので、1965年にロサンジェルスのサウスセントラルで起きたワッツ暴動<sup>3</sup>以来、最悪の暴動だといわれている (Abelmann and Lie 2-3)。スティーヴンソンによれば、暴動の結果、死者54名、負傷者2,383名、逮捕者12,000名以上を出した。財産に対する被害も甚大で、およそ3,600件の火事が起き、1,100件の建物が破壊され、4,500の店舗・企業が略奪や打ち壊しにあった。損害総額は10億ドルにおよんでいる。(280)

ここまでの情報をみると、ロス暴動は過去にも繰り返されてきた黒人と白人の衝突、ワッツ暴動の再来かとも思われるが、ロス暴動が過去の暴動と大きく異なっていた点は、それが「全米初の多民族都市暴動」(Abelmann and Lie 7)と呼ばれていることだ。もはやアフリカ系アメリカ人が唯一の暴徒ではなく、逮捕者の半数以上がラティーノであったといわれている。また、被告の警官についても、多くの文献に4人とも「白人」と書かれているが、実際にはそのうちの一人セオドア・ブリセノ (Theodore Briseno) にはラティーノの血が流れていることが判明している (Abelmann and Lie 8)。

しかし、より顕著な特徴としては、ロス暴動の被害者の多くが、「白人」ではなく、コリア系アメリカ人だったことである。さきほど、4,500の店舗・企業が略奪や打ち壊しにあったと述べたが、そのうちの過半数以上の2,300についてはコリア系の受けた被害だといわれている (Stevenson 280)<sup>4</sup>。さらに、彼らが屋根の上で銃をかまえたり、略奪者にむかって発砲する様子が繰

り返しテレビで放映されたことも (Abelmann and Lie 7; 高 44, 55)、コリア系アメリカ人を際立たせることになった。

## II

アメリカの移民史において、アジア系アメリカ人の歴史は比較的新しいといえるが、なかでもコリア系は、19世紀半ば以降大勢の移民がアメリカに渡った中国系や日系よりもさらに遅く、公式のコリア系移民が最初にホノルルに到着したのは1903年のことだった。1905年に韓国政府が公式移民を廃止するまで約7,000人が渡米(高135)し、その後は1910年に日本が日韓併合を強行したことなどもあって、1924年にアジア系移民がアメリカで全面的に禁止されるまでに約2,000人(主に政治亡命者、学生たち)のコリア人が渡米したにすぎなかった(高138)。コリア系移民が再び増え始めたのは、1950年に勃発し53年まで続いた朝鮮戦争に起因し、50年から64年までに約15,000人(戦争花嫁、戦争孤児、留学生ら)が渡米し永住権を取得している(高152-53)。しかし、コリア系移民を加速度的にアメリカに移住させることになったのは、1965年に制定された新移民法だった。これによって、従来の国別割り当て制度が廃止され、アジアからの移民が急増することになったのである。コリア系移民の場合、1970年代に入って移民が本格的になる。1970年当時約76,000人だったコリア系移民は、年を追うごとに年間の移民数が増えていき、ロス暴動の起きた1990年代には約100万人と、70年のときの13倍に増えている(高167)。ではなぜコリア人は移民の道を望んだのだろうか? 高賛侑が三大要因としてあげたのは、社会的要因(政情不安「軍事政権と民主陣営間の衝突」、経済的要因(「極端な外資導入政策」による経済危機)、子どもの教育(「学歴偏重主義が一層深化」)の3つである。(高166)彼らもまた移民として「自由の国」アメリカに大きな期待を寄せていたことがわかる。

このようにコリア系の人口は急増したが、アメリカ社会における認知度は長いこと他のアジア系に比べて低かったようである。たとえば、カリフォルニア大学バークリー校の教授エレイン・キム(Elaine Kim)は、子どもの頃の思い出を以下のように語っている。

Throughout my childhood, the people who continually asked, “What are you?” knew nothing of Korea or Koreans. “Are you Chinese or Japanese?” they would

ask confidently, as if there were no other possibilities. The “world history” courses I took started with Greece and Rome; China and Japan were barely mentioned — and Korea never was. (“They Armed in Self-Defense” 10)

コリア系アメリカ人は、中国系や日系移民と同様、白人社会のレイシズムにもさらされてきたが、“Chinks”あるいは“Japs”と呼ばれることも多かったようで (Kim, “Korean Americans” 70)、アジア系として差別されながらコリア系としてのアイデンティティは認められず不可視の存在に追いやられるという複雑な立場にあった。初期のコリア系移民で、自伝 *Quiet Odyssey* を著したメアリー・パイク・リー (Mary Paik Lee) もその一人で、自らの受けた差別的体験を次のように語っている。

As we [Mary and her brothers] neared the church, we saw a man standing in the doorway. As we were walking up the steps, he placed his arm across the door and said, “I don’t want dirty Japs in my church.” My reply was, “Would it make any difference if I told you we are not Japanese but Korean?” He said, “What the hell’s the difference? You all look alike to me.” (Lee 54)

このとき教会の前に立ってメアリーたちを罵倒したのはこの教会の牧師だった。

コリア系アメリカ人が他のアジア系に対する差別語を浴びせられる経験は、20世紀後半になっても続いている。1995年に出版されたチャンネ・リー (Chang-Rae Lee) のデビュー作 *Native Speaker* の中では、コリア系アメリカ人の主人公ヘンリー・パーク (Henry Park) の息子ミット (Mitt) が近所の子もたちから言葉によるいじめを受けたことを彼に伝えるシーンが描かれている。

The kids in my father’s neighborhood gave him trouble that first summer. One afternoon Mitt tugged at my pant leg and called me innocently, in succession, a *chink*, a *jap*, a *gook*. I couldn’t immediately respond and so he said them again, this time adding, in singsong, “Charlie Chan, face as flat as a pan.” (103)

チャーリー・チャンというのは、1920年代から30年代にかけて出版され、映画やラジオドラマやコマ割り漫画にもなった人気探偵小説の主人公で、ホ

ノルル警察に勤務する中国系の探偵である。ミットは正確にはコリア系の父親ヘンリーと白人の母親リーリア (Lelia) の間に生まれた混血少年だが、父親譲りの外見が近所の悪童たちのターゲットになったと考えられる。

このように、アジア系としては認識され差別的な言葉を浴びせられることはあっても、コリア系としてのアイデンティティを認められることは少なかったコリア系アメリカ人が、ロサンジェルス暴動をきっかけに、被害者であると同時に銃で応戦する民族としてアメリカのメディアで大きく取り上げられ、突如可視化することになったのは、大変な皮肉だといえる。

### III

エレイン・キムはコリア系アメリカ人有識者として、ロス暴動後最も早くコリア系コミュニティのために動いた一人だと考えられるが、1992年5月18日の『ニューズウィーク』に寄せたエッセイの冒頭で次のように述べている。

When images of armed Korean shoppers and headlines about conflicts between African-Americans and Korean-Americans were suddenly beamed from Los Angeles two weeks ago, seemingly out of nowhere and without history or context, I knew it was another case of visual media racism. The disembodied images implied that both groups come from cultures more violent and racist than the dominant culture. They also diverted attention away from a long tradition of racial violence that was not created by African-Americans or Korean-Americans. (10)

キムはこのエッセイの中で、コリア系アメリカ人としての自らの体験を織り交ぜながら、ロス暴動が起きた背景には、過去500年におよぶアメリカ史に織り込まれた人種間暴力、ロドニー・キング事件の容疑者を無罪とした司法システムの問題があり、いわゆるアフリカ系とコリア系の間の問題の根源は、コリア系移民所有の店舗にではなく、ロサンジェルスやサクラメントやワシントンD.C.の企業や行政の側にあると指摘している。さらに、コリア系アメリカ人としての自らの意識の形成に、アフリカ系アメリカ人の公民権運動が関わっていることを主張する一方で、ロス市警や州政府がサウスセントラルで最初の暴動が起きたときの対応に失敗した際、怒りの真の根源を守

るためにコリア系アメリカ人が人間の盾にされたのではないかと述べている。(Newsweek 10)

サウスセントラルで放火や略奪の被害にあったコリア系アメリカ人が警察や消防に連絡しても、助けは全く来ず、翌日はついにコリアタウンにも被害がおよぶ。しかし、コリアタウンもまた「無防備状態のまま棄ておかれ」たのに対し、ロス市警は「暴動が起きるとすぐに白人地域に対する警戒を強化」し、「ビバリーヒルズを襲撃した60余名の暴徒が5分後に逮捕されたという報道」もあった。(高 41)

ロス暴動の最中、コリア系アメリカ人を支えたのは、一つは「ラジオコリア」だった。英字新聞はほとんど読まず、ロドニー・キングの評決が29日に行われることすら知らなかった多くのコリア系移民にとって、ロサンゼルスで24時間放送を行っていた「ラジオコリア」からの暴動関係の生放送は彼らの命綱ともいえた。もう一つは、コリア系アメリカ青年団であり、街の治安を守るため1991年12月に結成された青年団は、「夜のタウンの巡回活動を行って街の治安維持」を行ってきた。高賛侑によると、29日の夜11時頃青年団の団長とメンバーたちは、コリアタウンの入り口でハリウッドに向かう黒人たちと向かい合う。一発触発の緊張がみなぎる中、団長が黒人たちに「ブラザーズ!」と呼びかけ、自分たちもキング事件の不当な評決に対しては怒りを感じていることを伝え、コリアタウンを通らないでほしいと頼むと、黒人たちは納得して引き上げたという(高 39-40)。このように、青年団の働きで一度は黒人との衝突を回避できたのだが、翌30日は武装した黒人のギャング団がコリアタウンを襲撃し、店舗を無差別に破壊した後、主にラティーノたちが略奪を行ったといわれている(高 43)。警察も消防もあてにならない状況の中、青年団は海兵同志会とともに、銃をかまえて店舗の前や屋上に陣取り、「暴徒が近づけば威嚇射撃を行」い(高 44)、その様子がメディアで大々的に取り上げられたのだった。

しかし、威嚇射撃とはいえ、コリア系アメリカ人が黒人やラティーノに向かって発砲したことは確かで、悲劇的だったのは、当時大学生で青年団の一員でもあったエドワード・ソン・リー(Edward Song Lee)が暴徒と間違えられ同胞側の銃弾を浴びて死亡するという事件が起きたことである。ただし、コリア系アメリカ人で死亡したのは、リーのみで、死者の44%が黒人、31%がラティーノ、22%が白人という統計が出ている。(Stevenson 288)

さきほど引用した『ニューズウィーク』のエッセイで、エレイン・キムは読者にコリア系や他のマイノリティに対する理解を求め、メディアや政府や

警察の対応、人種差別的な白人支配階級を厳しく批判しているが、実はこの後、キムは白人読者からさらなる人種差別的なヘイトメールを何百も受け取るようになる (Kim, “Home” 222-23)。このあたりの事情については、その翌年出版された *Reading Rodney King / Reading Urban Uprising* (1993) に収録された論文 “Home Is Where the Han Is: A Korean-American Perspective on the Los Angeles Upheavals” の中で、明らかにされている。キムに同情的な手紙は直接彼女に届いた一方、ヘイトメールのほとんどは『ニューズウィーク』に送られたという。その中には、キムがアメリカ生まれであるにもかかわらず、コリアに送り返されるべき外国人であるかのような書き方をしたものも少なくなかったようだ。また、キムのような移民の子どもが、大学の教授にまでなっていてアメリカに感謝しないのは恩知らずだと主張する手紙や、アメリカにおける有色人種の文化の価値を真っ向から否定する手紙もあった。

こうした白人優越主義者たちの敵意やレイシズム、アメリカ生まれの彼女に対しコリアへ帰れと言う白人の読者ののはなはだしい無知や無理解に、キムは大きなショックを受けながらも、これがアメリカの受け継いだ遺産の一部、つまり「たとえそれが、国外追放や強制収容、まぎれもない殺人を意味しようとも、ある種の声を黙らせたり、ある種の存在を消し去ったりすることを要求するレガシー」(Kim, “Home” 226-27) だと認識している。一方、白人からの手紙の中にもレイシズムと戦うことに関心を寄せているものもあり、非白人——アフリカ系やコリア系だけでなく中国系や日系、ネイティブ・アメリカンからもキムに共感する手紙が数多く届き、キムに “a multicultural democracy” (227) の夢を垣間みさせている。実際、キムが最も心打たれた手紙は、強盗の罪を犯し刑務所に服役中のアフリカ系アメリカ人の囚人から届いたもので、かつては黒人以外は皆敵だと思っていた手紙の主は、服役中の12年間に他の非白人の苦闘についても学び、それぞれの闘いが同じものだと感じるようになったと語っている。ロス暴動で黒人がコリア人に対して行ったことに心を痛めた彼は、キムに「あなたは私の姉妹なんだ。あなたの仲間の苦闘は、私の仲間の苦闘でもあることを知ってもらいたいがために、私はこの手紙を書いています」(Kim, “Home” 227-28) と語りかけている。

エレン・キムはこのように、アフリカ系や他の人種的マイノリティに対する深い共感を示しながら、コリア系アメリカ人が非白人としてアメリカで生き残る道を探ろうとする。彼女がコリア系について考えるとき、忘れることができないのが、63年間アメリカに滞在しながらついにアメリカ市民となることがなかった父の記憶である。最初は法で禁じられていたためだが、

後には父親自身が市民となることを願わなかったからだと説明されている。錦衣故郷に帰ることを信じていた彼女の父は、88歳のときオークランドで亡くなり、結局遺言に従って遺骨だけが 코리아 に帰ったのであった。(Kim, “Home” 229)

父の記憶は、アメリカで周囲からの憎しみや拒絶にさらされながら生きていかざるをえない 코리아 系の人々が、 코리아 系としての民族意識を通してコミュニティを見出そうとするのは当然ではないかという考えをキムに持たせることになる。事実、ロサンゼルスで警察にも行政にも見捨てられたときも、彼らは「 코리아 系としての民族意識、つまり絶滅の脅威にさらされたとき、抵抗し反撃しようとする決意」(229)に訴えるほかなかったとキムは語っている。さらに、キムたちが非白人としてのアイデンティティを主張しようとするたびに、怒って人種的視点から見ることを拒否し、突然「我々は皆アメリカ人なのだ」と言い出す白人支配文化に対し、キムは、「アングロ系アメリカ人が文化的ナショナリズムの終息を要求する方が、 코리아 系アメリカ人が民族意識を捨てることよりはるかに易しい。我々は、民族意識を持つことによって、 코리아 系アメリカ人としてもアメリカ人としても、我々の存在を否定する非道なレイシズムを切り抜けて生き残ることが可能なことから」(Kim, “Home” 230)と述べている。

#### IV

エレイン・キムを突き動かしたロス暴動の余波は、 코리아 系アメリカ人作家たちにも現れている。現在プリンストン大学で創作を教えている、チャンネル・リー (1965-) もその一人である。彼はソウルに生まれ、3歳の時に家族とともに渡米したいわゆる 1.5 世<sup>5</sup>である。

彼のデビュー作 *Native Speaker* は、ヘミングウェイ賞やアメリカ図書賞を含め数々の賞を受賞した秀作だが、1995年、つまりロス暴動の3年後に出版されている。スパイを生業とし、白人女性と結婚した 코리아 系アメリカ人ヘンリー・パークを主人公とするこの作品において、ロス暴動は決して主要なテーマとして描かれていない。しかし、その細部に目を向けると、確かにその影響がみられる。

たとえば、ヘンリーの父親は、韓国で最高の教育を受け、生産工学の修士号も取得しているながら、アメリカでは英語が不自由なこともあり、ニューヨークのゲッターで青果物商店を営む 코리아 系移民という設定である。他の多く



のコリア系移民と同様、ヘンリーの父親も非常に勤勉で、そのかいあって金銭的にはある程度の成功をおさめている。チャンネ・リー自身の父親は精神科医だったので、ヘンリーの父親像はむしろ当時スモール・ビジネスの分野で成功した典型的なコリア系移民の姿を反映しているといえる。ニューヨークとロサンジェルスという違いはあるが、1960年代半ば以降、黒人やヒスパニック系の多い大都市の片隅にコリア系移民もまた根付いていった。ヘンリーは父親が金持ちになる前は、そうしたヒスパニック系や黒人たちといっしょに公園でサッカーをして楽しんだこともあったと語っている。しかし、一見おだやかな会話のなかで、いっしょにプレーしたのは「アフリカ出身の黒人」(50-51)だと強調する父の言葉のうちに、アフリカ系アメリカ人に対するコリア系移民の否定的な態度が垣間みられる。

後に、ヘンリーの父は家族とともに白人の多い地域へと引越すが、ヘンリーは、父も母もそこでは決して心からくつろぐことができなかったと語る。どうして自分たちは、周囲の人間がどう思っているかをそれほどまでに気にしなければならないのかと考えるうち、ヘンリーは自分たちがアメリカ人、つまり白人支配文化の価値観にどっぷりつかっていることに気づく。

That we believed in anything American, in impressing Americans, in making money, polishing apples in the dead of night, perfectly pressed pants, perfect credit, being perfect, shooting black people, watching our stores and offices burn down to the ground. (52-53)

最後の部分は、非白人であるコリア系移民が白人支配文化の価値観に盲目的に従うことの矛盾をつき、それがロス暴動にもつながっていることを示唆しているようにも思える。

ヘンリーの父親に対する見方は厳しく、移住してきたばかりの二人の妻子持ちのコリア系移民を父が長時間低賃金で雇っていたことにふれ、他の成功した移民と同様、父は同じコリアの出身者を搾取していたと語っている(54)。一方、かつて父親の店が黒人の強盗に襲われ、地下室に連れて行かれた父が縛り上げられピストルの弾倉で何度も殴られ、あやうく射殺されそうになった事件にも言及することで(56-57)、コリア系移民がおかれた環境の厳しさをも示している。

物語の後半部分で、ヘンリーは再びコリア系店主としての父親の態度にふれるが、彼によれば、父は「鉄のような厳しい態度で店を経営し」、「客のこ

とは敵視していた」(185)。父のそのような態度は、必ずしも黒人に対してだけではなくたが、黒人を相手にするときは、父は「まさしく石と化した」(185)とヘンリーは語る。

こんなヘンリーの父も黒人と何とかやっていくために、かつて黒人を店で雇ったこともあったのだが、彼らが時間を守らなかったり、店の品物をしばしば友人に回したりしたため、結局はうまく行かなかったとヘンリーは語る。父が彼らの代わりに雇ったのは、自分たちと同様に英語がうまく話せないが仕事熱心なスペイン語系の移民たちだった(187)。

一方、ヘンリーは、父とは対照的に、コリア系移民でありながら英語の技術を磨き、ニューヨーク市長を目指すまでになった政治家ジョン・クワン(John Kwang)のプレ・キャンペーンを支えるチームの一員に任命される。この作品中、最もロス暴動の影響を感じさせるシーンの一つが、黒人教会の前で、コリア系、黒人、ヒスパニックの入り交じった聴衆に向かって行われたクワンのスピーチである。非白人たちを前にして、クワンは、次のように語りかける。

“A young black mother of two, Saranda Harlans, is dead. Shot in the back by a Korean shopkeeper. Charles Kim, a Korean-American college student, is also dead. He was overcome by fumes trying to save merchandise in the firebombed store of his family. I was in the hospital room when he died. I attended Miss Harlans’ funeral. And I say that though they may lie beneath the earth, they are not buried.

“So let’s think together in a different way. Today, here, now. Let us think that for the moment it is not a Korean problem. That it is not a black problem or a brown and yellow problem, that it is not a problem of our peoples, that it is not even ultimately a problem of our mistrust or our ignorance. Let us think it is the problem of a self-hate. (151)

このように、クワンは、問題が他者への憎しみではなく、自分に対する憎しみの受けとめ方だと主張し、非白人がお互い理解し合うべきだと促す。しかし、「我々の共通点、つまり悲しみや苦痛や不公正の方が、常に我々の違いより強いことをわかってください」(153)と締めくくり、喝采を浴びていたクワンを銃弾が襲う。ヘンリーたちの助けでなんとか一命をとりとめたものの、その後クワンが再び政治家として脚光を浴びることはなく、最後には

コリアへ戻っていく。

ここには、作者チャネ・リーの人種観や移民に対する見解が垣間みられるが、さきほどの引用の前半部分に戻ると、ここにあげられた二人の人物は、名前や事件の状況に若干手が加えられてはいるが、明らかにロス暴動と関連がある人物である。チャールズ・キム (Charles Kim) はロス暴動で唯一死亡したコリア系アメリカ人エドワード・リーを指していると思われる。また、サランダ・ハーランズ (Saranda Harlans) は、その名前と事件の類似性から、1991年3月16日にサウスセントラルのエンパイア・リカー・マーケットでコリア系店主の妻トゥ・スンジャ (Soon Ja Du) に、オレンジジュースを万引きしたと勘違いされ射殺された15歳の黒人少女ラターシャ・ハーリンズ (Latasha Harlins) を指していると考えられる。

ラターシャ・ハーリンズの事件は、キングが警官たちに殴打された事件のわずか2週間後に起きている。ラターシャがトゥ・スンジャに背を向けた瞬間、後頭部を撃たれて倒れる映像もまた、当時繰り返し放映されている。ステイヴンソンは、当時の裁判記録をはじめ膨大な資料を検証しこの事件について詳しく分析しているが、彼女は、検察側対トゥ事件は、その結果が1992年のロサンジェルス暴動を引き起こした2つの訴訟事件の1つだと明確に述べている (Preface xvii)。ステイヴンソンはまた、被害者と容疑者がともにマイノリティの女性だったことに注目し、この事件の特異性を次のように指摘している。

The shooting was devastating; but it also was profoundly different from the usual violent scenarios across racial lines that typically garner public outrage. The people involved, Soon Ja Du and Latasha Harlins, were female, not male. Du was Korean, not white. She was a mother, wife, and shopkeeper, not a policeman, deputy sheriff, security guard, or domestic terrorist with a white sheet over his head. . . . Her murder was not another challenge of black masculinity, that constant theme in the history of race in America. It underscored, instead, the vulnerability of the most defenseless in the nation's socially constructed hierarchy — women and children of the racially, culturally, economically, and politically marginalized. (Preface xvi)

ステイヴンソンはさらに、この事件の裁判官がユダヤ系女性ジョイス・カーリン (Joyce Karlin) であったことを指摘し、事件の8ヶ月後の11月15日に彼

女がもっと公正な判決をくだしていれば、事態が変わっていたかもしれない可能性を示唆している。しかし、カーリンのくだした判決は、「その年カリフォルニアで銃による故殺 / 第三級謀殺 (voluntary manslaughter) の判決を受けた重罪犯人に対する最も寛大な判決の一つ」(Preface xvi-xvii)、つまり「保釈後に刑期を務める必要はなく、執行猶予5年、400時間のコミュニティサービス、500ドルの罰金、ラターシャ・ハーリンズの葬儀の費用と医療費」(236) というものだった。

この判決は、ラターシャの家族にとってもその支援者にとっても到底納得のいくものではなかった。コリア系コミュニティの中ですらこの判決を批判した人々がいた。たとえば、英語版 *Korea Times* の編集者 K. W. リー (K. W. Lee) は、「人命を奪って1日たりとも刑務所に入れられないとは。同じコリア系移民のブレンダン・シーン (Brendan Sheen) は、犬を虐待したかどで郡刑務所での30日の拘留を言い渡されたというのに」(242) と述べている。そして、このことは、「ロサンジェルス刑事裁判制度が、アフリカ系アメリカ人の女性や子どもも含め、アフリカ系アメリカ人に対し完全に偏見を持っている」(242) ことの証拠だと多くの者が主張しているとステイーヴンソンは指摘している。

結論からいえば、この判決は黒人コミュニティを激怒させることになった (Stevenson 242)。ラターシャ側の支援者は、カーリン裁判官に対するリコール運動などの活動も起こしたが<sup>6</sup>、黒人コミュニティとコリア系コミュニティの間の緊迫感が高まったこともいめない。そもそも、ロドニー・キング事件に関する評決後に起きたロス暴動のスローガン “No justice, no peace” は、その1年前、ラターシャが殺害された直後に、事件の起きたエンパイア・リカー・マーケットで抗議者たちが繰り返し唱えた言葉だった (Preface xviii)。

ステイーヴンソンをして、「多くの者にとって、抗議を引き起こした不正義のシンボルはロドニー・キングではなく、むしろラターシャ・ハーリンズだ」といわしめた (Preface xviii) ほど、ラターシャの事件は黒人コミュニティにとって重要な事件だったのである。

さきほどの *Native Speaker* のジョン・クワンのスピーチの中で、チャンネ・リーが取り上げた二人の犠牲者の一人が、ラターシャ・ハーリンズを思わせるサランダ・ハーランズであったことも、このこととは無関係ではないだろう。ジョン・クワンという、物語の中でやがて失脚する運命の政治家の口を通してとはいえ、ロス暴動におけるコリア系の唯一の死者エドワード・リーを思わせる人物と、サランダ・ハーランズを同列に扱うことで、チャンネ・

リーはコリア系とアフリカ系が共存する道を探っているようにも見える。ただし、語り手のヘンリーについては、スピーチ・セラピストの白人女性リーリアとの結婚という別の道を選ばせることになるのだが。

## V

コリア系作家の中でもう一人、ラターシャ・ハーリンズ事件に注目した作家がいる。この事件をもとに“The Court Interpreter” (1999) を著したタイ・パック (Ty Pak, 1938-) <sup>7</sup> である。彼は韓国に生まれ、20代後半でアメリカに移住したコリア系移民の作家であり、1970年から1987年にかけてはハワイ大学の英文学科で教鞭をとっていた。

タイ・パックもまた、この事件に関わる主要な人物の名前を変えている。トゥ・スンジャはジュー・ムンジャ (Moonja Joo) となり、ラターシャ・ハーリンズはナターシャ・ブルック (Natasha Brook) となっている。“The Court Interpreter” は明らかにフィクションだが、登場人物の名前や事件の描き方からこの物語がラターシャの事件に基づいていることに読者はすぐに気づくはずである。

しかし、UCLAの英文学者キンコック・チュン (King-Kok Cheung) もその論文“(Mis) - interpretations and (In) justice: The 1992 Los Angeles ‘Riots’ and ‘Black-Korean Conflict’” (2005) で指摘する通り、たとえば、いくらフィクションとはいえ、タイ・パックによるナターシャ・ブルックの描写は亡くなった黒人少女に対してあまりにもアンフェアだといえる。

The loudly keening mother, the epitome of crushing maternal sorrow, had beaten and abused her daughter and turned her out of her house many years ago. Natasha herself, at the tender age of 15, was the mother of two children already, and had been living with her current boyfriend. Instead of pity for her or her orphaned children, she evoked with her enormous weight of 250 pounds orgiastic images of eating, mating, and breeding destined to unbalance global ecology. (92)

ここに描かれたナターシャ・ブルックの姿は、現実のラターシャ・ハーリンズとはかけはなれている。上訴裁判所で述べられたラターシャの実像は、「すぐれた運動選手で、教会にも積極的に通い、アシスタント・チアリーダー

としてユース・センターでの活動に加わっている成績優秀な生徒」(Cheung 25)だった。また、ラターシャの母親はすでに亡くなっていたが、物語の中のラターシャには娘を虐待した母親がいるという設定になっている。

さらに、物語に描かれた事件そのものの概要も、裁判記録に基づいたステイーヴンソンの記述とは大きく異なり、黒人少女に不利になるような描写が増えている。たとえば、物語の中で、事件の様子が撮影されたビデオを陪審員たちに見せるシーンがあるのだが、そこには、指に1ガロンのオレンジジュースをひっかけ、パンを1斤、林檎一袋、その他の包みを脇の下や腕に抱えて出口に向かう巨大な姿が映し出され、気づいた店主のムンジャが呼び止めると、その万引き未遂の人物がちょっとためらったあと、レジにやってくる様子が描かれている。そして、レジに来るといきなりムンジャをジュースで殴り、パンチを食らわせたあと、敵を征服した剣闘士のように悠々と立ち去ろうとしたとある。

しかし、実際には、ラターシャ・ハーリンズはオレンジジュースを1本、外から見えるように背中バックバックに入れ、手に2ドルつかんで(ジュースの代金は\$1.79)まっすぐレジに向かったのである。店主の方は、ラターシャがバックバックにジュースを入れていたため、万引きを疑いバックバックごとラターシャから取ろうとした。疑われたラターシャは身に覚えがないため従姉妹から借りたバックバックを取られまいと店主を何度か殴る。店主の方も椅子を投げて応戦するが、最後にはレジの下にあった銃で威嚇するつもりが、改造銃であったため指をかけたとたんに発砲され(この銃は盗まれたことがあり、戻ってくる間にほんの少しふれただけで発砲するよう改造されていたことが証明されている)、銃を見て立ち去ろうとしたラターシャの後頭部にあたってしまったというのがほぼ真相のようである<sup>8</sup>。

タイ・バックがこの物語を書いた段階で、どこまで事件の真相を把握していたか疑問である。しかし、キンコック・チュンも指摘する通り、彼の黒人少女の描き方は、「人種差別的」であり、「性差別的」でもある(13)。

法廷通訳を引き受けることになる一人称の語り手は、物語の冒頭部分で、主流のメディアがこの事件を受けて、コリア系アメリカ人が一人残らず1ドル稼ぐために顧客を殺すことを躊躇しないような、血に飢えた金の亡者であるかのように報じることに對し、“so unfair” (90)だと語り、「今や犠牲者はラターシャ・ブルックではなく、ジュー・ムンジャと全コリア系アメリカ・コミュニティだ」(91)と主張する。

しかし、主流のメディアの事実の歪曲を指摘する一方、語り手は、「同様

に歪んだ見方を伝えているかもしれない」(Cheung 13) コリア系新聞に書かれていたことはすべて事実と受け取り、前述のようなナターシャ像を描き、テレビに放映された彼女の家族や友人の悲しみを「全くいやらしくて胸が悪くなるようだ」(Pak 91) と表現している。パックの作家としての態度に対するキンコック・チュンの以下の批判は、まさに的を射たものといえよう。

Pak's alterations have little narrative function except the ossification of stock images such as the unwed and single black teenage mother, the dysfunctional black family, and the black criminal. Instead of using his poetic license to undermine common misconceptions, Pak reprises the popular imaginary of model Asians and aberrant blacks. (26)

## VI

以上、ロサンジェルス暴動とコリア系アメリカについて、そのきっかけとなったと考えられる2つの訴訟事件—ロドニー・キング事件、ラターシャ・ハーリンズ事件—とくに後者に焦点をあて、その影響がみられるコリア系アメリカ作家チャンネ・リーの *Native Speaker*、タイ・パックの短編“The Court Interpreter”にふれながら、考察してきた。ロス暴動は発生した直後からさまざまな方面に影響を及ぼし、くり返し研究者によって取り上げられ、最近も2013年にUCLAの歴史学者ブレンダ・スティーヴンソンによって *The Contested Murder of Latasha Harlins* が出版されたばかりだが、その前年の2012年にはUCLAで発行されている *Amerasia Journal* で事件発生後20周年を記念して特集が組まれている。ロス暴動によってコリアタウンが破壊され甚大な損害を被った上に、メディアによってネガティブなイメージを背負わされたコリア系アメリカから、チャンネ・リーをはじめとするコリア系アメリカ人1.5世の作家たちが輩出したことは、歴史上の皮肉かもしれない。しかし、文学的観点からすれば、優れた作家が世に出たことは、コリア系アメリカのみならずアジア系アメリカ、ひいてはアメリカ社会全体に貢献するような出来事でもある。その反面、文学の許容度を度外視し、アメリカに深く根付く人種問題を読み違えると、“The Court Interpreter”のような、人種関係を悪化させかねない作品を生んでしまうこわさもアメリカ社会は孕んでいる。

## 注

本稿は、アメリカ学会第49回年次大会分科会「アジア系アメリカ研究」(国際基督教大学2015年6月7日)における口頭発表に加筆修正したものである。

- 1 韓国では重要な事件をしばしば数字で表現する。cf. 三・一運動(Sam-il-undong)。
- 2 4人の警官とは Stacey Koon、Laurence Powell、Timothy Wind、Theodore Briseno であり、正確にはパウエルに対しては不一致陪審(hung jury)となった(Stevenson 284)。多くの文献に4人とも「白人」と書かれているが、実際にはそのうちの一人プリセノにはラティーノの血が流れていることが判明した(Abelmann and Lie 8)。また、この事件の裁判はここで終わらず、1992年8月4日、司法省はキングの公民権侵害のかどで4人の警官を起訴した。その結果、1993年4月17日に連邦陪審によってクーンとパウエルの2名に有罪の評決が下されたが、残り2名についてはここでも無罪となっている。(Stevenson 285)
- 3 ワッツ暴動も、きっかけは白人のハイウェーパトロールとロサンジェルス市警察が、飲酒運転の疑いで黒人青年(21歳の Marquette Frye)とその母親(逮捕を妨害したかど)ともう一人の黒人女性(警官につばを吐きかけたかどで逮捕されたが、実際にはこの女性ではなかった。群衆は彼女が妊娠していると勘違いしていた)を逮捕したことで、その場で目撃していた黒人の群衆が怒りて暴徒と化してしまったのである。(Stevenson 293-94)
- 4 アベルマンとリーによれば、ロサンジェルスの3,100のコリア系アメリカ人の店舗・企業のうち半分以上が被害を被り、損害総額は3億5千万ドルにのぼる(8)。
- 5 1.5世とは、「新移民法が発効した70年代以後に米国に移り住んできたコリア系新移民のうち、幼児として親に連れられてきた後、90年代に成人となった」者たちのことである(小林 86)。
- 6 LHJC(Latasha Harlins Justice Committee)は地方検事 Ira Reiner とともに上訴もしたが、控訴裁判所もまたトゥ事件に関するカーリン裁判官の判決を支持した。それは、ロス暴動が起こるわずか8日前のことだった。
- 7 タイ・バックは、1938年に韓国に生まれ、幼少期から青年期にかけて日本による統治や朝鮮戦争を体験する。その後、ソウル大学で法律を学び記者として働いたあと、1965年に合衆国に移住した。オハイオ州の Bowling Green 州立大学で Ph. D をとったあと、20代後半で渡米したという不利な条件にもかかわらず、1970年から1987年にかけてハワイ大学の英文学科で教鞭をとり作家になっている(Ty Pak / Author)。
- 8 Stevenson, *The Contested Murder of Latasha Harlins* の第4章、第6章参照。



## 参考文献

- Abelmann, Nancy, and John Lie. *Blue Dreams: Korean Americans and the Los Angeles Riots*. Cambridge: Harvard UP, 1995. Print.
- Korean-American Population Data. *Asia Matters for America*. East-West Center. Web. March 27 2015.
- Cheung, King-Kok. "(Mis) interpretations and (In) justice: The 1992 Los Angeles 'Riots' and 'Black-Korean Conflict.'" *Melus* 30.3 (2005): 3-40. Print.
- Gooding-Williams, Robert. "Introduction: On Being Stuck." *Reading Rodney King / Reading Urban Uprising*. New York: Routledge, 1993. 1-12. Print.
- "Lee, Chang-rae." *Encyclopedia of World Biography*. 2015. Web. 4 May 2015.
- Lee, Chang-rae. *Native Speaker*. New York: Riverhead, 1995. Print.
- Lee, Mary Paik. *Quiet Odyssey: A Pioneer Korean Woman in America*. Ed. Sucheng Chan. Seattle: U of Washington P, 1990. Print.
- Kim, Elaine H. "Home Is Where the Han Is: A Korean-American Perspective on the Los Angeles Upheavals." Gooding-Williams 215-235.
- . "Korean Americans in U.S. Race Relations: Some Considerations." *Amerasia Journal* 23. 2 (1997) : 69-78. Print.
- . "They Armed in Self-Defense." *Newsweek* 18 May 1992: 10. Print.
- Pak, Ty. "The Court Interpreter." *Moonbay: Short Stories by Ty Pak*. New York: Woodhouse, 1999. 89-118. Print.
- The Staff of the Los Angeles Times. *Understanding the Riots: Los Angeles before and after the Rodney King Case*. Los Angeles: Los Angeles Times, 1992. Print.
- Stevenson, Brenda. *The Contested Murder of Latasha Harlins: Justice, Gender, and the Origins of the LA Riots*. Oxford: Oxford UP, 2013. Print.
- Ty Pak / Author. 6 May 2015. Web. 6 May 2015.
- "Watts Riots." *Civil Rights Digital Library*. Digital Library of Georgia, 2013. Web. 26 March 2015.
- 有賀貞編『エスニック状況の現在〈現代アメリカ4〉』東京：日本国際問題研究所、1995年。
- 越智道雄・庄司啓一他「補論 報告と討論 ロサンゼルス暴動——現代アメリカ社会の一断面」有賀 293-345。
- 高賛侑・李秀『アメリカ・コリアタウン——マイノリティの中の在米コリアン』東京：社会評論社、1993年。
- 小林富久子「5 コリア系アメリカ文学の流れ——断片化された記憶から紡がれる亡命者たちの語り」『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』植木照代監修、山本秀行・村山瑞穂 編 京都：世界思想社、2011年。

